

# 日本ヴィクトリア朝文化研究学会 第23回 全国大会プログラム

日時：2023年11月18日（土） 10:00～17:15  
場所：関西大学 千里山キャンパス 第1学舎5号館（E棟）  
（オンライン Zoom 併用）

★受付 第1学舎5号館（E棟）3階 9時30分より

★研究発表（10:00～11:35）

	第一室（5号館305号室）	第二室（5号館306号室）
10:00～10:45	司会：同志社大学 桐山 恵子 1. 静穏の中の運動性—アルバート・ムーア《夢みる人々》（1882）と《夏の夜》（1890） 筑波大学（院） 梶間 里奈	司会：大阪公立大学 田中 孝信 1. 『水の子』の三人の女神に見られるヴィクトリア女王の表象 慶應義塾大学（院） 高 雅麗
10:50～11:35	2. Astonishment, Terror and Industrial Monsters in the Work of J.M.W. Turner and Charles Dickens 日本女子大学 Neil Addison	2. テムズ川から見るロンドンの〈夜〉の文化史—ヴィクトリア・エンバクメントの電気街灯導入実験を中心に 中央大学（院） 橋口 龍也

★シンポジウム（12:30～15:00） 5号館403号室

ヴィクトリア朝の／と人形（劇）

司会・報告：東京理科大学 松本 靖彦  
報告：中京大学 岩田 託子  
報告：明治大学（非） 加藤 匠

★特別講演（15:15～16:30） 5号館403号室

司会：白百合女子大学児童文化研究センター 西村 醇子

現代人形劇の100年にヴィクトリア朝文化の影響をみる

人形劇の図書館 湯見 英明

★総会（16:45～17:15）

司会：同志社大学 玉井 史絵

★懇親会（17:45～20:00）

会場：レストラン チルコロ

## 【研究発表】

### （第一室）

1. 静穏の中の運動性—アルバート・ムーア《夢みる人々》（1882）と《夏の夜》（1890）

筑波大学（院） 梶間 由香

アルバート・ムーア（1841-93）は古代ギリシャの衣を纏いソファで微睡む女性像を数多く描いた画家である。本発表ではムーア作品に潜む運動性に着目し、彼の芸術が絵画に運動性を表現した20世紀モダニズムを予期していたことを示す。主に取り上げる作品は《夢みる人々》（1882）と《夏の夜》（1890）である。この2作品に描かれた女たちの顔や身体は類似しており、同時期に撮影された連続写真のように、ムーアは1人の女性の連続した運動を表したと考えられる。何もしていないように見える女たちは実は動いているのである。色調や装飾の反復も画面に動きを生み出している。この静穏の中に運動性を含める表現には、W・ペイターが「ヴィンケルマン」（1867）で古代ギリシャ彫刻に認めた「自制の中の運動」や古代ギリシャの壺絵の影響がある。

古代ギリシャと 19 世紀イギリスを織り込んだ 2 作品は、二次元の画面に運動性を有する点において 20 世紀モダニズムへとつながってゆく。

## 2. Astonishment, Terror and Industrial Monsters in the Work of J.M.W. Turner and Charles Dickens

日本女子大学 Neil Addison

While Charles Dickens's novels depict Victorian men of science as potential titans of progress, they also show industrial machines as demonstrating a personified monstrousness which dwarfs those who constructed them. When the 'Rocket' locomotive made its first commercial journey in 1830 Dickens was only 18 years old, but by 1846 the steam train had appeared in the early numbers of *Dombey and Son* (1848). Here, the new railway stations were shown transforming their environs, urban development acting 'like the giant in his travelling boots' (500). Dickens was greatly influenced by pantomime, which underpinned his aesthetics (Eigner 8), but in *Dombey and Son*, 'The Signal-Man' (1865) and *Our Mutual Friend* (1865) his astonishing and monstrous descriptions of trains and steamboats seem to draw from another source. While Dickens was affected by his involvement in the 1865 Staplehurst railway accident, such passages can also be traced to the artistic influence of J.M.W. Turner and the legacy of the sublime. Edmund Burke's 1757 definition included astonishment and terror, qualities which are evident in Dickens's treatment of storms and which reflect the sea paintings of Turner (Dennett 1994). Dickens's trains and steamboats also appear to emulate Turner's industrial paintings, and this paper will discuss how Dickens's personification of the new behemoths of transport was influenced by Turner's 'industrial sublime' (Rodner 107). Dickens's industrial monsters function as a metaphor for astonishment and terror, warning his readers of the potential dangers of industrial transport.

### (第二室)

#### 1. 『水の子』の三人の女神に見られるヴィクトリア女王の表象

慶應義塾大学(院) 高 雅 麗

本発表では、チャールズ・キングズリーの『水の子』(1863)に登場する三人の女神とヴィクトリア女王の関連性を考察する。Mrs Bedonebyasyoudid と Mrs Doasyouwouldbedoneby は道徳的な存在であり、主人公 Tom に報いを与える教訓的な役割を果たす。一方、教母を象徴する Mother Carey は、海の世界の支配者として描かれている。小説の結末では、三人の女神が同一の存在であることが示唆される。キングズリーは 1859 年にヴィクトリア女王の牧師に任命され、さらに、「水の子と王室のゴッドマザー」というイラストが 1901 年の『パンチ』に掲載された。これらを考慮すると、架空の女神たちの描写には現実の女王からの影響を読み取ることができよう。女神たちの描写が、19 世紀社会における道徳的指導者としてのヴィクトリア女王の姿をいかに強化しているか、その表象を明らかにしたい。

#### 2. テムズ川から見るロンドンの〈夜〉の文化史

——ヴィクトリア・エンバンクメントの電気街灯導入実験を中心に

中央大学(院) 橋 口 龍 也

1878 年、ロンドンで初となる電気街灯が実験的に点灯した。その舞台となったのは、テムズ川沿いの堤防であるヴィクトリア・エンバンクメントである。19 世紀後半は、街灯が紆余曲折を経て徐々にガス灯からより明るい電灯へ切り替わり、帝都ロンドンのイメージがさらに近代的なものに変容した時期である。しかし、その最初期であるテムズ川沿いの堤防の電気街灯設置が、いかなる議論のもとに行われたのか、また市民がいかに受け止められてきたのかは十分に検討されていない。本発表は、街灯の設置と管理を行っていた首都土木局 (Metropolitan Board of Works) の議事録と、新聞・定期刊行物上の言説・表象を手掛かりとして、ロンドンにおける電気街灯導入初期の実態とその認識を明らかにする。これらの史料からは、他国の電気会社との交渉過程や、ガス灯と比較した電灯の評価、堤防上の治安との関係性、実用化に向けた一般市民の働きかけが浮かび上がってくる。最後に、電気街灯がロンドンという都市空間の〈夜〉にもたらした文化的影響を考察してみたい。

### 【シンポジウム】

## ヴィクトリア朝の／と人形 (劇)

マダム・タッソーの蝋人形館が人気を博し、パンチ&ジュディが上演され続けたヴィクトリア朝英国は豊かな人形 (劇) 文化を有した時代であり、これらの人形を用いた見世物は当時の社会的・文化的価値観を体現したメディアでもあった。

一方、人間は人形を拵えるだけでなく、人形のように扱われることがある。また、あくまで自ら意思決

定し、行動しているつもりでいながら、実は何者かに人形のように操られていたという状況も起こりうる。このように人物がそれと知らずに生身の「人形劇」に巻き込まれてしまうような事態は、文学の中の話に留まらず、ヴィクトリア朝の錯綜した政治情勢のうちにも見出すことができる。

本シンポジウムでは、展示人形、ならびに人形劇、および比喻としての人形（劇）等を通して見えてくるヴィクトリア朝文化の特質について考察する。その考察の現代日本における意義についても探求したい。

報告 1) 動かない人形のドラマ——ディケンズを通してみる人と人形<sup>ひとがた</sup>の関わり方

東京理科大学 松本靖彦

ヴィクトリア朝には、私的な空間で鑑賞されたり愛玩される人形から、蝋人形館のように公的な空間で展示される人形まで種々雑多な人形が存在したが、たとえ人形遣いに操られることによって「生命」を吹き込まれずとも、それら動かない人形と所有者・鑑賞（観察）者・製作者（そして実在するならば、人形のモデルとなった人物）との間には様々なドラマが生まれていた。本発表では、そのようなヴィクトリア朝の（主に）「動かない」人形をめぐる無言のドラマを巧みに描写したディケンズの文章を通して、人形と人間の関わり方について探ってみたい。

報告 2) ヴィクトリア朝のパンチ&ジュディ

中京大学 岩田 託子

動画検索すると、パンチ&ジュディ上演をPCで楽しむことができ、歴史や蘊蓄諸々を知ることが可能な時代です。とはいえ、まず、ヴィクトリア朝に戻ってパンチ&ジュディの木偶性・ストリート性・多彩なキャラクターを確認します。次に、ヴィクトリア朝英国に最盛期を迎えた幻灯と1895年誕生の映画の初期にあらわれるパンチ&ジュディを紹介します。人形劇だったはずが、新規メディアに取り込まれ、スクリーン・プラクティスに生きるさまをお見せします。最後に、坪内逍遙、夏目漱石はじめ同時代の日本人英学者がパンチ&ジュディにどのように反応したかを概観する予定です。

報告 3) 背後で操るのは誰だ？——『パンチ』誌から眺めるインド大反乱

明治大学（非） 加藤 匠

ヴィクトリア朝期の「パンチとジュディ」について考察するならば、パンチ人形芝居にかこつけて命名され、ヴィクトリア朝社会の様々な側面を諷刺というフィルターを通して描き出した『パンチ』誌を取り上げないわけにはいかないだろう。本発表では、大英帝国で起こった戦争——特にインド大反乱に注目しながら、『パンチ』誌がいかなる表象を展開していたのかを論じていきたい。大英帝国の支配に忠実だと思われていたセポイが反乱を起こしたと知ったイギリス国民が見せた、大反乱の背景を探る試みを辿りながら、『パンチ』誌と歴史的コンテクストの絡み合いについて再考したい。

【特別講演】

司会：白百合女子大学児童文化研究センター（客員研究員）

西村 醇子

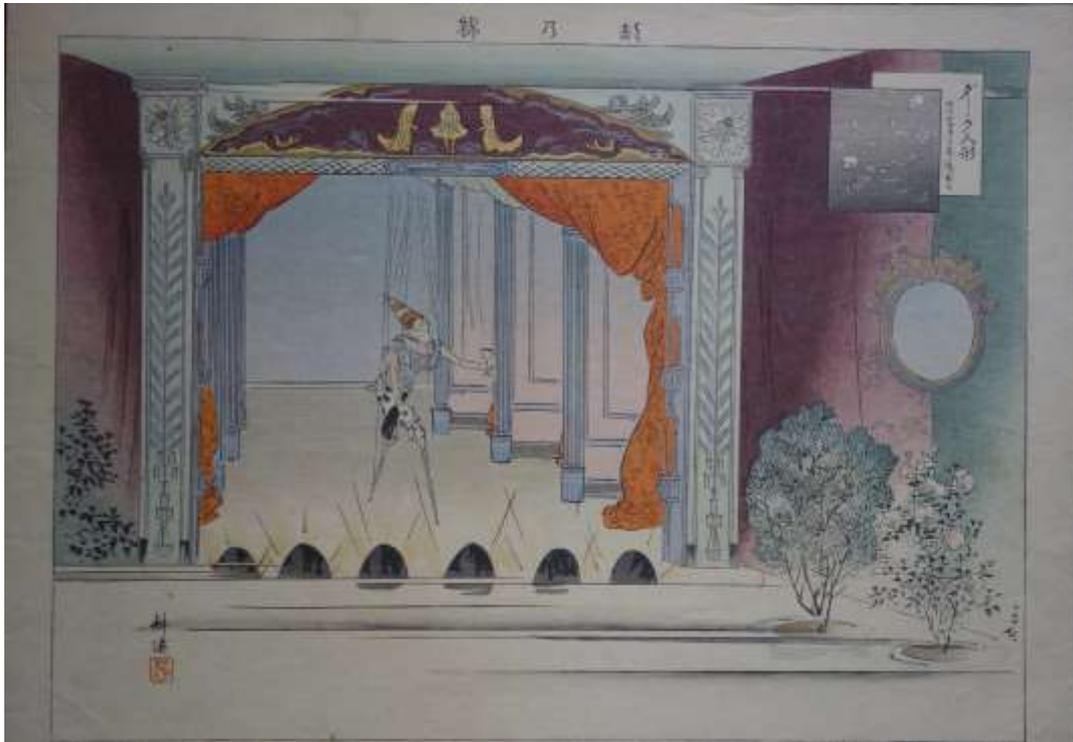
現代人形劇の100年にヴィクトリア朝文化の影響をみる

人形劇の図書館 館長 湯見 英明

現代人形劇というジャンルが誕生したのは1923年、ちょうど100年前のことだ。大正時代はモダニズムの時代、モボやモガともいえる若き芸術家たちが、新興芸術運動などの潮流の中、先鋭的な西洋文化を受容していく、その流れに人形劇もあった。とはいえ、それは唐突に興ったものではない、少し時代を遡る明治27（1894）年、英国からやってきた人形劇の一座の上演があった。D'Arc 一座は日清戦争を挟み2度来日、数年間各地で上演し大きな反響を呼んだ。その舞台を描いた錦絵が残るが、それは視覚的にはヴィクトリア朝の舞台装飾といえるもので、この英国の一座が長く深き歴史をもつ日本の人形芝居の土壤に蒔いた西洋の種が、大正モダニズムの中にハイブリッドの萌芽をさせることになる。

直接的には、ゴードン・クレイグの“Über Marionette”（超マリオネット）という刺激的な西洋演劇論が「マリオネット」を新しい舞台芸術表現と捉えさせ、千田是也ら若き芸術家たちの「人形座」による大正12（1923）年11月の試演会を現代人形劇の嚆矢とされ、これを「新興芸術の人形劇」という。

偶然にも同年に、倉橋惣三による「子どものための人形劇」が、幼稚園という場で「ギニョール」による実践として始まっており、いわば芸術至上主義的と、子どもたちという新たな観客が、ほどなくして重なることで「現代人形劇」と称されるようになるのだが、日本の重い人形劇史のなかに突如出現した「現代人形劇」という新潮流は、ヴィクトリア朝文化にきっかけがあったといえるのではないか。その辺りを人形劇の側からの視点で見つめてみたい。



月岡耕漁「ダーク人形」錦絵（木版多色刷）1894（人形劇の図書館蔵）

\*\*\*\*\*

### 懇親会（17：45～20：00）

会場：レストラン・チルコロ 新関西大学会館南棟4階 電話 06-6368-7553（キャンパスマップ18）  
会費：5,000円（学生・院生は3,000円） 大会当日に受付でお支払いください。  
事前予約締切：11月10日（金） 予約は「大会参加フォーム」をお使いください。何かありましたら、  
担当（高橋）[miho@kansai-u.ac.jp](mailto:miho@kansai-u.ac.jp) までご連絡ください。

### <会場へのアクセス>

関西大学のHPには、阪急千里線「関大前」駅からの案内が出ていますが、会場に一番近いのは関大前駅の隣駅の「千里山」駅です。途中から坂道が続きますが、徒歩10～15分です。関西大学のキャンパスをゆっくり散策したい方は、「関大前」駅から20～25分ほど歩いていただければ、会場に到着いたします。

- ・ **電車**：阪急電鉄千里線「関大前」駅あるいは「千里山」駅下車、第1学舎5号館まで徒歩約15～20分
- ・ **タクシー**：阪急電鉄千里線「千里山」駅下車、タクシーで「関大北門」下車、北門の前の建物が5号館  
片道約700円（3～4名で乗り合わせていただくと経済的です）。所要時間は駅から5分です。  
※どの駅からも上り坂になりますので、脚に自信のない方には、往路はタクシーをお勧めします。
- ・ **新幹線「新大阪」駅から**：JR おおさか東線「新大阪」駅から「久宝寺」行で「JR 淡路」駅下車。改札口左手にある商店街を抜け、阪急電鉄「淡路」駅で「北千里」行に乗り換え、「関大前」駅か「千里山」駅で下車。
- ・ **大阪（伊丹）空港から**：大阪モノレール「大阪空港」駅から「門真市」行で「山田」駅下車、阪急電鉄に乗り換え「千里山」駅か「関大前」駅で下車。

<阪急千里線「千里山」駅から「関大北門」への地図>



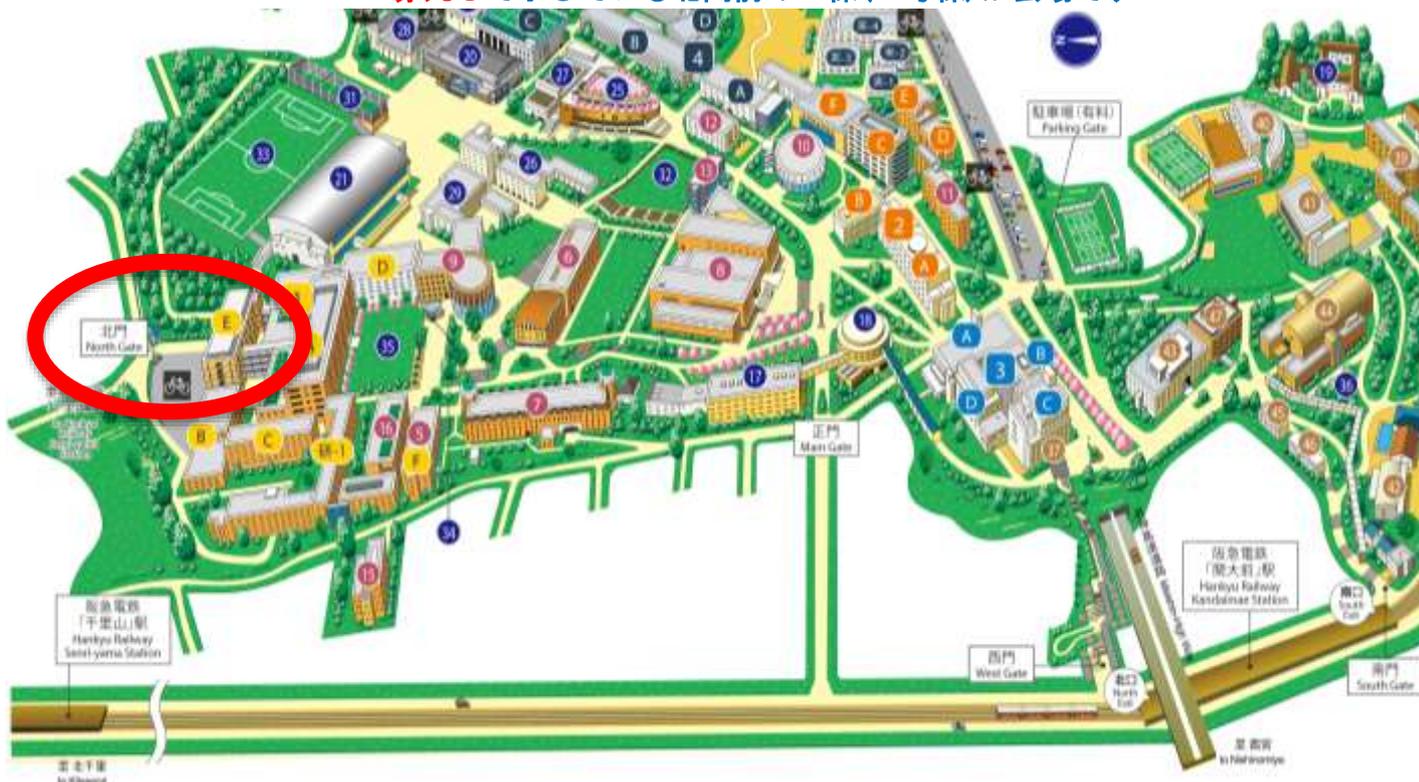
関大北門へ入ると、真正面の建物が会場のある第 1 学舎 E 棟(5 号棟)です。正面玄関より入って右手のエレベータに乗り、3 階まで上がってください。

詳細は以下の情報をご覧ください。

★関西大学千里山キャンパスへの交通アクセス <https://www.kansai-u.ac.jp/ja/about/campus/>

<千里山キャンパスマップ>

赤丸○で示している北門前の E 棟(5 号棟)が会場です



## <会場案内>

\*学内と周辺にはいくつかの食堂や売店がありますので、ご利用ください(当日は授業日のため、正午あたりから混みます)。

\*お弁当などをお持ちいただければ、建物内にある休憩エリアやベランダ(戸外)等でご飲食可能です。

\*休憩時間中の会場内でのご飲食は可能です。

・会場のある第1学舎エリアでは、村野藤吾による建築物に加え、簡文館(博物館)も見学いただけます。

[https://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/campus\\_map/course/course01/detail01.html](https://www.kansai-u.ac.jp/nenshi/campus_map/course/course01/detail01.html)

・博物館前の高松塚古墳壁画再現展示室は、屋外で開放されています。また、第1学舎1号館2階ロビーに飾られている陶板の「豊臣期大坂図屏風」も一般開放しています。ぜひご覧ください。



11月19日(日) エクスカーション 集合時間 10:00 場所: 国立文楽劇場ロビー

国立文学劇場にて文楽鑑賞 (事前予約・松本靖彦先生による解説付)

・第一部 (10:30 開演)

双蝶々廓日記 (ふたつちょうちょうくるわにつき)

面売 (めんうり)

[https://www.ntj.jac.go.jp/assets/images/02\\_koen/bunraku/2023/11gatsu\\_poster.jpg](https://www.ntj.jac.go.jp/assets/images/02_koen/bunraku/2023/11gatsu_poster.jpg)

参加をご希望の方は 10月23日(月) までに、担当(高橋) [miho@kansai-u.ac.jp](mailto:miho@kansai-u.ac.jp) までメールでお申し込みください。参加方法については、メールをいただいてから個別に連絡いたします。ご質問等も、お気軽に担当までご連絡ください。現体制での最後の企画となります。皆様の奮ってのご参加を心よりお待ちしております。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

(The Victorian Studies Society of Japan)

事務局: 〒610-0394 京田辺市多々羅 1-3

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部

玉井史絵研究室内

Tel: 0774-65-7223

E-mail: [victorianstudies.japan@gmail.com](mailto:victorianstudies.japan@gmail.com)

学会 URL: <http://www.vssj.jp/>

